

美作学園中期計画・中期目標

2021年度～2025年度

2025年の学園創立110周年を見据えて：

美作学園は大正4（1915）年、苫田教育会が官民双方の協力・支援を得て津山市田町に女性の地域人材養成を目的として設置された津山高等裁縫学校が始まりでした。その後数度の教育改革等の変遷を経て高等学校へ発展し、戦後の新教育制度のもとで地域の要請に応じて昭和26（1951）年に短期大学を、昭和42（1967）年に大学・附属幼稚園を設置し、さらに大学院を開設し地域の高等教育機関として発展してきました。創立から百余年を経過し栄枯盛衰を繰り返しながらも美作学園は在校生総数が2千人を超える学園に発展してきました。今日、少子高齢化の地域社会、急速な科学技術やグローバル化が進展する変化の激しい社会の中で、到来する困難な課題に対応できる“生き抜く力”をもった人材育成養成が求められています。美作学園は来る2025年に創立110年を迎えます。この期を見据えて学園の各学校部門の現状と課題を整理して、各部門の相互連携を深めることで学園の発展の相乗効果が発揮できるように検討を重ね、学園の魅力を高めて継続的発展ができるよう取り組んでいきます。

これまでの美作学園の建学の理念や、学園の発展の歴史を踏まえ、次の時代に向けて中期計画・中期目標を策定し、学園の職員が一致協力し、年度ごとの事業計画に反映し目標を達成することにより地域社会の活性化・発展の一助となるよう願っています。

美作学園「建学の理念」

本学園は豊かな情操と知性を育むことにより、人としての道を培い、一人の自立した人間として国際的な視点から社会に貢献できる、自由で創造的な人格の育成を目的とする。

あわせて本学園は、寒さに耐え凜として薫り高い花を咲かせる白梅を学花に定め、これを目指す人間像の象徴とする。

美 作 学 園

1. 「教育のみまさか」を実現する。そのために「みまさか人材」を育成する

- ①建学の理念に基づいて各校の特徴を生かした教育目標を学園全体で共有し、学校間の連携により相乗効果を発揮して地域社会に貢献できる“みまさか人”を育成する。
- ②各部門の相互連携により相乗効果を発揮し高い教育力をめざす。

2. 地域をキャンパスとした学園づくり

・地域社会に密着した教育・研究活動、社会貢献を行い地域の発展に寄与する。地元の行政団体、商工団体、住民団体等と相互に連携協力、情報交換しながら学園づくりを展開し、地域の活性化、発展の原動力の一助になる美作学園を目指していく。

3. 学園内の部門間連携を強化する運営体制の整備

・各部門間の意思疎通・連携協力体制を整備し相乗効果を向上させるために、法人の組織・機能体制を整備する。さらに適切、且つ迅速な意思決定ができるような組織体制を構築し、地域社会へ貢献できる学園を目指す。

4. 耐震改修・改築、施設整備

- ①大学・短大は耐震改修・改築を学園 100 周年を期に順次実施しているが、図書館、女子寮の改築が終了し、令和 3 年（2021）度末までに 6 号館の改築であり、続いて 1 号館の耐震改修、2 号館の耐震改修を令和 6 年度末をもって終了する。その後、資金計画と勘案し、旧 6 号館の取壊し、旧第一白梅寮の活用について検討する。
- ②高校では第 2 校舎の耐震改修・施設整備を実施しているが、次年度については本館の耐震改築工事の開始、令和 5（2023）年度についてはコミュニケーションセンターの増築を計画している。続いて資金計画を見ながら、体育館、武道場の改築計画を進めていく。また、定員増加を検討しており、設置基準を満たすために所有土地の校地整備を行っている。
- ③幼稚園は園舎を改築後、25 年を経過し外装、内装を整備する時期であり外観整備（外装）にまず取り組み続いて内部の改修・改装や保育施設の整備を実施していく。

5. 学生募集・生徒募集・園児募集の強化

少子化、地域の高齢化、若者の人口流出が進む地域に学園は立地しており、従来から若者の定住化や地域貢献を目指しているが人口統計上今後は更に厳しい環境が続いていく。この状況でも大学、短大は高校との接続や地元地域との連携を強化し定員確保を目指していくが、それを実現するには各部門の「教育力」が客観的に保証されていることが条件である。

- ①大学では収容定員を充足しているが短大進学者は減少しており、短大では定員未充足が続いている。専攻科介護福祉専攻も資格が国家試験となった年から急激に入学者が減少した。大学の収容定員増を含めて地域と連携して今後の方向性を検討する時期にある。
- ②高校も厳しい環境であるが、同市内の私立高校が 2 年後に全面移転するため、本校に対する地域の期待もあり、入学定員を増加を実施する。入学定員・収容定員を満たすために更に教育力を向上し地域の期待に応えたい。
- ③園児募集は子ども園、市立幼稚園との競合で厳しい環境ではあるが、当園で「学びの土台づくり」を深化させて、広報・情報伝達を組み合わせ園児募集に結び付けていく。

6. 財政基盤の確立

これまで、法人全体では教育活動収支ベースで収入超過の状態を維持できていいるが、個々の部門については歴史的には波がある。今後の安定的な財政基盤は学生・生徒・園児募集の如何により大きく左右されるので、学生・生徒・園児募集に最大限の継続的努力を注ぐ。

- ①大学・短大では学生募集の版図が変化し狭域化しつつあり学生募集地域や募集方法の再検討を行う。また、地元の諸関係団体と意見交換、情報交換を実施し地域の人材養成ための学部・学科の検討を行い、地元の学生数の増加を図る。高校では定員増により生徒数の増加を図る。附属幼稚園では先ず定

員確保を目指し多様な方法を検討する。

②経費の抑制に関する目標として各部門の適正な人件費管理を行う。事務部門の効率的人材配置や業務の効率化、組織の見直し、再編成による人件費管理を適切に行う。併せて物件費の削減につながる仕組みを導入し、従来の経常支出を洗い直す。

(参考) 学生・生徒・園児数の推移 (10年間)

	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
大学	937	970	975	967	973	946	911	897	904	900
短大	257	241	262	254	238	259	247	239	217	198
高校(全日)	746	815	772	806	790	834	803	824	831	870
高校(通信)	163	153	147	123	140	138	129	129	134	142
幼稚園	210	206	202	209	202	192	163	164	154	178
合計	2,313	2,385	2,358	2,359	2,343	2,369	2,253	2,253	2,240	2,288

③外部資金獲得の継続的確保；国庫、地方自治体、公益団体等の補助金獲得や、特に大学教員には科学研究費等の積極的応募を促し、年間の増加策を検討する。

④学園の施設設備を地域住民に開放し使用料収入の増加を図り、また地域住民のニーズを把握し有料の講座を実施する。

⑤金融資産の積極的運用を実行するために、金融機関と情報交換し安全な利殖を実行する。

7. その他の管理運営に関する目標

①安全管理に関して、危機管理体制を強化する。学生・生徒・園児の安全を守る観点から災害対策、防犯対策等の危機管理体制整備を図る。

②法令順守等に関して「美作学園教職員倫理規範」を整備し、常に教育者としての高い倫理観をもって適切・誠実に判断し行動するために定期的に研修を実施する。

美作大学・美作大学短期大学部 2021年度～2025年度

【現状と課題】

人口減少が急速に進行する津山市に立地する小規模私立大学である本学の経営は困難さを増している。本学は自宅通学範囲の18歳人口が少なく、それために学生は他県から集めるしかない。加えて近隣の公立大学（新見公立大学、県立広島大学など）が入学定員枠を増加させ、さらに地方国立大学の定員増の動きが本格化している。本学は地域の暮らしを支える人材育成において、また知の拠点の高等教育機関であり地方創生において重要な役割を担っているが、長期的に見ると存続・維持は年々難しくなっていると云わざるを得ない。

学科	入学定員	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度 二次試験者数	2015年度以降 7年間平均	入学定員 充足率	
大学	食物	80名	91	98	93	84	87	86	82	87	91	89	1.11
	児童	80名	98	91	92	90	94	96	90	81	86	91	1.14
	社会福祉	50名	61	41	48	44	49	44	58	50	69	52	1.03
短大	栄養	40名	48	37	48	49	45	29	42	35	41	42	1.04
	幼児教育	70名	82	73	64	79	70	87	50	65	47	69	0.98
合計	320名	380	340	345	346	345	342	322	318	334	341	1.07	

このような状況下でも、教育実績や学生指導実績に対

する高い評価を得ることで、中四国各地及び沖縄県を中心として多くの学生が入学し、これまでは入学募集定員を過去10年以上にわたり満たしている。

しかし、今後の見通しについて言えば、18歳人口の激減に加え、国庫補助の違い（授業料格差）や官尊民卑など国公立大学との不公平な競争を強いられるという逆境が年々強まっていることで、一層厳しい経営環境となることは疑いない。今後、ありきたりの取り組みでは生き残ることは不可能であり、それに打ち勝つための取り組みが必要とされる。

本学では、創立50周年を機に本学が生き残るためには、「地方大学の雄」と評価される域にまでレベルアップすることが必要との認識に立ち、「地方大学の雄」と呼ばれる存在への挑戦をスタートさせた。現在、それに向けて歩を進めているところであるが、中期計画では、さらに改革の速度を早め実績を積み上げることが必要である。またそれに向け理事、評議員の経営陣のリーダーシップとそれに呼応した全教員、事務職員の結集と奮闘が一段と必要となっている。

本学が名実ともに「地方大学の雄」と呼ばれる存在になるために、右図に示す項目の実現（諸課題の解決）をめざす。中期ビジョンにおいては、これらの項目（課題）に関して一段のステップアップを行う。



【本学の中期ビジョン＝地方大学の雄と呼ばれる存在への道】

1. 「圧倒的な教育力形成」に向け全力傾注

『教育の美作』、『学生を伸ばす美作』のために、

- ・ 教育力の向上は、高等教育機関の根幹をなすとともにエンドレスの課題でもある。みまさかの教育力はあらゆる意味で本学の生命線である。
- ・ 学科は個々の学生と日常的、直接的に接しており、教育、学生指導の組織の母体位置付ける。

- ・卒業時において入学時より格段に高い学習意欲を獲得させる。学びへのモチベーションを高める教育を重視する。
- ・それゆえ学科は、個々の学生の学修状況やディプロマポリシーの理解度やモチベーションの把握（アセスメント）をベースとして、きめ細かく学生を理解し指導する。
- ・学生の状況確認をもとに、学科教育課程の点検や体系化を進める。
- ・大学、短大の各学科とも高い資格・免許取得をめざす。
- ・特に、国家試験を通して資格取得が必要とされる学科（食物学科、社会福祉学科、短大専攻科介護専攻）では、同分野の国公立の合格率等を凌ぐ成果を出しているが、今後も実績を積み上げる。
- ・コロナ禍におけるオンライン教育の経験は、地方に立地するハンデを軽減化し、本学の教育力を向上させる新たな種である。各分野のトップリーダーや各職場で活躍する先輩諸氏の教育への参画をオンライン活用で行う。

2. 学生に対するきめ細かい支援の充実

地方の小規模大学は、学生へのきめ細かい支援にその良さがある。本学は特に「面倒見の良い大学」として高い評価を受けており、この評価を損なうことなく定着させる。

キャンパスをみたらアットホーム感は、他大学と真似できない特長である。この校風を損なうことなく、「学生を大切にしない職員は、“美作の職員”にあらず」をモットーとして学生教育、指導の充実をはかる。学生支援は日常的には、担任制を生かして学科単位できめ細かく行うが、就職支援や学生支援の事務の専門部署との連携のもと、入学から卒業までを通して実施する。

（就職支援活動について）

- ・就職支援は、就職支援室を中心として、学生指導（就職ガイダンス）と就職先開拓の二本柱で実施する。また就職支援において資格免許取得や現場実習やインターンシップ等の学科教育との関係が深いことから連携を重視する。
- ・他県からの入学生が多いことから、地元美作地域はもとより出身県への就職指導に力をいれる。
- ・就職率はもとより、本学の特長である高い専門職就職率並びに出身県就職率を今後も重要指標とし、学生や家族の夢を叶える。

（学生支援活動について）

- ・学生支援は、全学生支援に関わる業務を担い、また専門性の高い学生支援が必要な業務について、それを遂行しているが、学科との連携等、その業務の質の向上を図る。そして「面倒見の良い美作」の内実を豊かにする全学的リード役を果たす。
- ・学生の自主性を重んじ、学生生活全般が学びの場となる指導体制を確立する。

3. 倫理綱領を大切にして思いやりのある学修環境、就業環境の形成

- ・学生の夢を否定する行為、学生を傷つけるアカハラ、パワハラとみなされるような行為の発生を未然に防がなくてはならない。本学倫理綱領の精神を遵守し、教育機関の職員のあるべき姿に基づいた勤務スタイルを確立する。

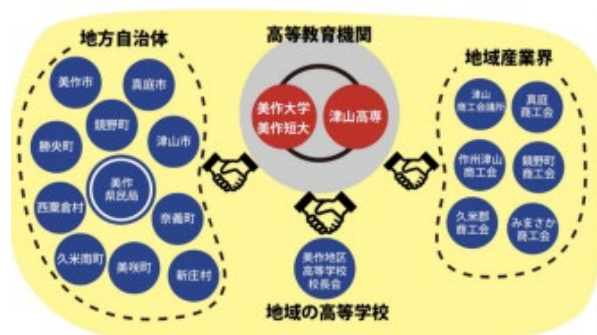
4. 教育職員と事務職員の連携、力の結集

教育の充実や学生指導の質を高めるためには、事務職員と教育職員がそれぞれの立場から連携

し、協力しあう体制を強固にする。補助金申請などにおいても連携なくしてなし得ないのは、ここ数年の教訓である。なお、「大学の事務職員の在り方について」は、中教審大学部会において大学の教育研究の高度化・複雑化を受け、事務職員の業務として「教員と事務職員との連携体制の確保と協働」を位置づけることが必要であるとの結論が出され、2017年4月1日施行で大学設置基準並びに短大設置基準改訂が行われている。

5. 美作圏域の自治体、商工団体、事業所等との交流、意見交換の促進

地域の人材育成や地域の人々の生活向上、地方活性化において地方大学の役割は大きい。地方大学の存在価値がそこで問われる。中教審答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」にその重要性が明記された。この地域において、地元自治体や商工団体等との意見交換、連携、協力、支援の仕組みづくりとして進行中の「美作地域人材育成プラットフォーム」（右図）や本学有識者懇談会、津山市、高専と本学による三者連携等を進めることにより、本学の人材育成や教育へのこの地域からの要望を集約して、教育や将来計画に生かしていく。また、地域人材育成や地方創生において高等教育機関間の共同、協力関係は重要であるので、津山高専との密接な関係を一層重視する。



6. 附属幼稚園の保育充実並びに教育や研究における連携の強化

附属幼稚園は、本学の教育、研究の場であり、地域の子育ての実践の場として存在している。附属幼稚園の教育のあり方（特に、ディプロマポリシーとカリキュラムポリシーとの整合性を高める）に関する議論を深める。また、この地域の子育て拠点としての展望を明確にし、実践を通して子育てに関わる知見を蓄積し、教育、研究の場として確立する。そのために、大学・短大と附属幼稚園の教育職員の研究、教育上の交流、連携を強める。

7. 美作高校美作大学コースによる高大連携・接続教育への挑戦

美作高校美作大学コースを主な舞台として、本格的な高大連携・接続教育により、地元を支える人材育成教育の質を高める。

8. 学長室の機能強化

地方大学の雄への道を進めるため、上記の諸課題に対応する必要がある。教務、学生支援を担当する二人の副学長に加えて、学長補佐として、広報担当と附属幼稚園連携担当者を置く。

岡山県美作高等学校 2021 年度～2025 年度

【現状と課題】

本校生徒の出身地は大部分が岡山県北の美作圏域であり、少子高齢化の著しい中山間地域である。

美作圏域の公立高校と私立高校 2 校が県北美作圏域の中学生の進学先の大部分を占めており、近年は公立高校の学区再編成並びに高校授業料の無償化と本校の教育内容の充実・多彩化を背景に本校への期待が高まり進学者が増加してきた。結果、県北高校では最大の生徒数となった。また、競合してきた市内の私立高校は 2 年後に他の地域に移転が決定しており、本校の教育の充実が期待されているところである。

美作圏域では 2 年後には唯一の私立高校となるが、「県北の人材は県北で育てる」ために本校の定員枠を増やして更に教育力を強化することで地域貢献を果たす。そのための今後 5 ヶ年を展望する。

1. 地域を支える人材の育成

少子化による人口減少が著しい県北にある学校として、地域を支える人材を育成していくことを教育の柱として教育活動を展開していく。高校という枠の中で教育した生徒を企業に送り出すのではなく、地域の企業の方々にも一緒になって地域を支える人材の育成に協力して頂くという考えのもと、生徒主体の「白梅プロジェクト」と称したコースや部活動が連携した、美作高校全体としての地域交流活動を実践していき、地域の方々から様々なことを学び、人間力の向上を目指す教育を展開する。

2. 各コースにおける目標

①エクセル特進・特別進学コース

・岡山大学を含む国公立大学への合格者 10 名以上、難関私立大学への合格者を継続的に輩出する。

【数値目標】 G T Z Bゾーン以上 100%

偏差値 エクセル特進 56・特別進学 50 以上

大学入学共通テスト得点率 エクセル特進 70%以上

特別進学 60%以上

②美作大学コース

- ・高大 7 年（短大 5 年）一貫教育を行うことで、地域の食と教育と福祉を支える優秀な人材の育成を目指す。
- ・社会人として必要となるコミュニケーション能力や思考力、問題解決能力を高めるための教育を双方の協働のもとに行い、変化する時代のニーズに合った人材の育成を目指す。
- ・全国でも稀に見る先進的な同一法人内の「高大一貫教育」の実現を目指す。
- ・技術や知識を習得するだけでなく、それを活用できる実践的な人材の育成を目指す。
- ・コース特色科目を通して、豊かな想像力・創造力を身に付けさせるとともに、生徒が持っている個性を十分に伸ばさせる教育を目指す。
- ・共通科目やコース特色科目の履修・知識の習得により、大学での学びや研究を行う上で、

またその後の国家試験、採用試験等に必要となる確かな基礎学力の習得を目指す。

【数値目標】進研模試 国・数・英 偏差値 45 以上
スタサポ 国・数・英 G T Z Bゾーン以上
基礎力診断 国・数・英 220 点以上

③探究コース

- ・基礎学力の定着を図る。
- ・高校生としてのルールとマナーを身に付けさせる。
- ・清掃のできる生徒の育成。
- ・進路実現に向けて適性を見いださせる。

④ I Tスペシャリストコース

- ・目標を持ち、自発的に行動できる生徒の育成。
- ・検定取得率 100%
- ・好奇心を常に持ち、何事にも全力で打ち込むことのできる生徒の育成。

⑤現代創造コース

- ・基礎学力の定着と各種検定合格率の向上
- ・自分の得意を活かした進路選択と進路実現
- ・言葉遣い、マナーを身に付け、コースの一員としてのプライドを持って行動できる生徒の育成。
- ・人間力向上のためのプログラム作り

⑥ライセンスコース

- ・生徒の希望進路を実現させる。
- ・進路実現に向けて基礎学力を定着させる。
- ・地域と密接な関係を築き、地域を担う人材を育成する。

⑦福祉医療コース

- ・介護福祉士国家試験合格を目指すだけでなく、地域を支える人材となれるよう、日々の地域交流活動に積極的に関わる生徒を育成する。
- ・「地域から学ぶ教育」実践のために、自らも地域の人との連携が図れるような行動を実践する。
- ・介護実習に参加するにあたり、日頃から正しい言葉遣いや礼儀正しい姿勢づくりを身に付ける指導を行う。
- ・コース内の結びつきを目指す。

2. I C T機器を活用した授業の実践

I C T機器を活用しての授業を行うために、各教室へのプロジェクター等の設置を順次進めている。また、国が推奨するG I G Aスクール構想により、令和元年度よりエクセル特進・特別進学コースでは Chromebook を活用した授業を行っているが、令和3年度より新入生全員に導入し、I C T教育の充実化をはかる。授業はもとより、家庭学習でもそれを活用した学習スタイルの確立を早急に行う予定である。

3. 大学・幼稚園との連携の強化

美作大学コースの特色教育であるサテライト教室を導入して6年目を迎える。サテライト教室において大学生と一緒に大学の授業を受講することや、幼稚園での実習を経験することにより、職業理解や職業意識の向上が図られている。今後は更に、様々な交流を図り、さらなる意識向上を目指していきたいと考えている。

4. 新学習指導要領教育への対応と進路実績の向上

新しく変更となった「大学入学共通テスト」や「英語外部検定試験」などの大学受験の制度を研究し、すみやかな対応をし、さらに探究学習や学校行事を通じた本校独自のプログラムを構築し、「思考力」や「表現力」を身に付ける教育の実践を行い、進路実績の向上を目指すとともに、進学系コースの生徒の獲得に結びつける。

5. 福祉医療コースの取り組み

高齢化が進んでいる県北地域において、福祉は不可欠な職業であるが、徐々に福祉を目指す生徒が減少している現状である。福祉コースから看護系の進学先に進む生徒も多くいることから、医療進学系の新しいカリキュラムを加えた福祉医療コースを設置した。看護についての心構えや知識等を専門家の方々を招き、講演をしていただくことで身につけていく予定である。福祉と看護の繋がりを理解させ、福祉の重要性を認識する取り組みを実施する。

6. 運動部活動の強化

県北では自分の特技を求めて県南・県外へ流出する生徒が増加している。中でも野球やサッカーは競技人口も多く、県北での活動の場を求めている生徒も多いため、指導者や環境の整備を進めていき、本校に活躍の場を求めてもらえるような部活動の活発化を考えている。

7. 通信制課程の改革

高校卒業後には社会の一員として活躍できる人材の育成を目指し、コミュニケーション能力を身につけさせるため、生徒としっかり関わりを持ちながら教育を行うことを本校通信制の教育の特徴とする。全日制との連携を強化することにより、全日制の生徒が通信制の授業を利用することで単位を取得し、3ヶ年での卒業単位取得も可能である。また、就労支援事業所との連携協定により生徒の就労へ繋いでいくことにも取り組んでいく。

8. 校舎耐震化に対する計画

校舎の耐震化計画が急務となっており、以下の年度で耐震化を実施していく予定である。

令和3年度 第二校舎の耐震化工事・倉庫建築

令和4年度 新本館の新築工事

令和5年度 現本館の取り壊し、コミュニケーションセンター増築

その後、資金を見ながら体育館、武道場建築の計画を立案していく予定である。

9. 収容定員の見直し

10年以上にわたって収容定員を超えている状況であり、近年は経常費補助金の大幅な減額措

置を受けている。現在、グラウンド面積が設置基準以下であることから、北校舎跡地の一部を多目的グラウンドとして改修し、設置基準をクリアすることにより収容定員の増員を早急に進めていく。

美作大学附属幼稚園 2021 年度～2025 年度

【現状と課題】

少子化の著しい津山市ではその影響を最初に受けるのは幼児教育部門である。かつては大学附属を看板にして入園定員を下回ることはなかった。しかし少子化の進む中、近隣の幼稚園の子ども園化と給食提供や保育園の子ども園化、公立幼稚園の再編等々で競合が激化し、併せて入園・収容定員を満足できず厳しい幼稚園経営が余儀なくされている。

こうした状況下、平成 27（2015）年の学園 100 周年、平成 29（2017）年の大学設立 50 周年を期に附属幼稚園は「地域の子育て支援センター」として地域貢献することを誓い、就学前教育で「学びの土台づくり」の仕組みを構築した。保育の時間延長、園児募集に影響のある「未就園児親子クラブ（わかばくらぶ）」の充実や、「みまっば児童クラブ」を開設し、更に給食の提供を始めた。このような努力をもって少子化の影響は避けられず永続的運営のために向こう 5 ヶ年の充実を図る。

1. 園児募集の強化

・保育内容を公立幼稚園や地域の保育園と同質化してきており、次年改めて大学附属幼稚園の取組として保育内容の差別化を図り、特色を反映した保育を検討、実践することにより「地域の子育て支援センター」としての機能を強化し、就学前教育で「学びの土台づくり」の具体的成果を可視化する。その取組みと成果を地域に積極的に発信していく。

2. 大学・短期大学部及び高校との連携（学園部門間連携の強化）

・大学・短期大学並びに高校の教育研究資源の活用を見直して保育内容の充実を図り、さらに学生、生徒たちの学びの場として、また園児の育ちにつながるキャリア教育の学園資源の相乗効果を実現する。

3. 現行の事業内容の強化策の深化

- ・「未就園児親子クラブ（わかばくらぶ）」の保育内容について大学・短大、高校等の資源を活用し新しい取り組みと充実を図る。
- ・「親塾」を通じ“親と子の育ち”を大学・短大と共同し内容の充実を図り、園児の親の満足度をアップする。
- ・PTA 活動の充実（保護者研修や子育て相談等）を図り園児の親間のつながりを強化する。
- ・「みまっば児童クラブ」（放課後児童クラブ）について地域に周知されてきたが、事業内容を高め行政の協力を得て効率的な運営を実現していく。また現在、附属幼稚園で事業を実施しているが、手狭になっており移転場所が必要であり検討する。

4. 広報活動の強化

・幼稚園での取組内容について地域への広報・情報発信力が課題であったが、大学広報室と連携し発信力をアップしてきたが十分とは言えず、ホームページや Web 上の情報発信や SNS を活用した園児の親との双方向の情報伝達の仕組みを検討し、附属幼稚園の事業取組みさらに地域への情報発信を強化する。

5. 園舎の改修整備と幼稚園バスの更新

園舎を改築して 25 年を経過し、保育用具や内装、外装が劣化してきた。特に外装は取り急ぎ課題となっている。また、園児募集にも影響する幼稚園バス 2 台も老朽化しており安全面からもバス 2 台の同時更新を実施し園児募集に役立てたい。

以上